

1. あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、
2. あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、  
「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、
3. その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。  
あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、  
ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。
4. あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。  
主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。
5. その預言者、あるいは、夢見る者は殺されなければならない。  
その者は、あなたがたをエジプトの国から連れ出し、奴隷の家から贖い出された、  
あなたがたの神、主に、あなたがたを反逆させようとそそのかし、  
あなたの神、主があなたに歩めと命じた道から、あなたを迷い出させようとするからである。  
あなたがたのうちからこの悪を除き去りなさい。

## 説教

直接啓示を信じてはいけません。あるいは、“夢や幻を見た”とか、“直接神の声を聞いた”と言う者を信頼してはなりません。直接神の声を聞いたと言え、何か生き生きと神秘的で靈的なもののように見えますが、とんでもない誤解です。

申命記 13 章はこうした神秘的な直接啓示について教えます。青森なら“いたこ”、沖縄なら“ユタ”、韓国なら“ムーダン”という具合に、どこの民族にも土俗の“霊媒師”や“生き神”のような者がいるものです。しかもこれが民衆の信頼を得て意外と根強いものです。そして、キリスト教の仮面をかぶった土着の異端神秘主義が、キリスト教会の中にも侵入してきます。かつてのイスラエルの民の中にも、偽の「預言者」や「夢見る者」といった怪しい異端が「現われ」ました。「夢見る者」は視覚に訴えた直接啓示を見る者のことです。「預言者」は、文字通り本物の預言者のことではなく、お告げのような聴覚に訴えた直接啓示を受ける者のことです。こうした幻を見たり声を聞いて直接啓示を受けたと言う者が、自分が神憑っていることを証明する「何かのしるしや不思議を示し」のみならず、その直接啓示の「お告げ」がその通りに実現したとしても、その直接啓示を受けたという者が神に背くよう誘惑するならば、「その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない」と律法は命じます(3)。そして、その理由を「あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、本当に、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである」と解説するのです(3)。

つまり、ここで明確にされている真理、何より最も大切なことは、「主を愛」し「主に従って」「主の命令を守る」ことであって、直接啓示など、要するにどうでもいいということです。そして、直接啓示を受けたと主張するような神秘的なカリスマ性を帯びた人は、むしろ神の民を惑わす危険性もあるので、「預言者または夢見る者」のパフォーマンスではなく、その言っている内容に注目せよと言うのです。内容がおかしければ、「その預言者、あるいは、夢見る者は殺されなければならない」と厳しく死刑を命じます。そうして「あなたがたのうちからこの悪を除き去れ(「r;B';「徹底して破壊しろ、焼き尽くせ」の意味)」と命じられます(5)。いずれにせよ、どんなにすばらしい夢や幻を見ても、どんなに神秘的な神の声らしきものを聞いたとしても、それ自体は何の価値もありません。むしろそのような神秘的な現象は、

神が私たちの実体を知るための「試す（試験する）」道具に過ぎません。私たちが「心を尽くし、精神を尽くして、本当に神を愛するかどうかを知るため」の試金石です。肝心なのは「あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうか」です(3)。「あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければ」なりません。「主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければ」なりません(4)。

つまり、どんなにすばらしい夢や幻を見たり、神秘的な神の声らしきものを聞いたとしても、こうした神秘体験はすべて聖書から再吟味しなければなりません。神と人を愛することを命じる「律法」を基準に、正しく解釈し直されなければならないのです。この際、あくまで重要なのは神の律法を守って神を愛することであって、どんなにすばらしい直接啓示を体験しても、その結論が「律法」を守ることと全然関係なく、むしろ「律法」に背くことを言うなら、「その預言者、夢見る者のことば」に従ってはなりません。むしろ彼らは「殺されるべき」です。そうして「悪を徹底して除去」しなければなりません。繰り返しますが、重要なのは直接啓示ではなく、神を愛することであり、神の律法を守ることです。ですから、例えば直接神から「お告げ」があったという理由で、誰かと誰かを結婚させるというようなことは、悪霊に取り憑かれた霊媒師以外には絶対にあり得ないことです。なぜなら、神憑りのな権威で脅迫しながら大切な結婚を迫る行為自体、神と人を愛するよう教える「律法」に背くことになるからです。それは最もあくどい暴力です。人の人生を台無しにして、人の人生を破壊し、人を殺す、犯罪行為です。万一百歩譲って、たとえその人が本当に「この人と結婚しろ」という声を聞いたとしても、それを理由として相手に結婚を迫る行為は、絶対に神から出たものではありません。むしろ、それは人間の人生を破壊する悪魔から出た行為です。

そもそもその人が聞いたという声が、本当に神からのものかどうかをどのようにして知ることができるのでしょうか。実際に「声」が聞こえたり、「幻」や「夢」を見るというのなら、それが「神からのもの」であると判断する前に、病院の精神科に行った方がよいでしょう。なぜなら、その人の聞く「声」は幻聴かも知れないからです。あるいはその「幻」は幻覚かも知れません。たとえ病気でないとしても、このような幻聴や幻覚というものは、実はいくらでも人工的に作り出せます。それで薬物に手を出す人もいます。神の声を聞きたくて、或いは神を見たくて、薬物に手を出すのです。要するに、その人が聞いたという「声」は、果たして本当に神の声なのか、それとも悪魔の声なのか、自分の欲望の声なのか、それとも幻聴なのか、それは神以外の誰にも判断できないのです。その唯一の判断基準は、神の唯一の啓示である聖書です。聖書に無いことを言ったり、聖書に反することを言うなら、それは全く出鱈目なインチキ預言です。こうして、聖書に照らして、直接啓示の内容が神からのものか悪魔からのものかを判断しなければならないのですから、いずれにせよ、直接啓示そのもの自体は、全く意味をなさないことになります。ちなみに、申命記 18 章にも偽預言の見分け方が教えられています。それによると、言ったことが実現すれば主が語ったことが証明され、実現しなければ偽預言だと言われます。「わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。あなたが心の中で、『私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか。』と言うような場合は、預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。」(18:20-22)つまり、たとえ夢を見たり声を聞いたと言っても、それがその通り成就しなければ偽預言だということです。現実を実現しなければその真偽はわからないというのですから、この意味でも、直接啓示だけではそれが神のことばかどうか全く判断できないことになります。

初代教会の時代から、異端は、聖書に自分たちの言いたいことを付け加えたり、都合の悪い内容を取り除いて、自分勝手な偽のキリスト教をでっち上げてきました。神の啓示は旧新約聖書 66 巻で十分に完結しています。それなのに、これだけでは不充分とばかりに、都合の悪い所を取り除いたり、勝手に付け加えます。神秘主義の異端の場合、聖書では不充分とばかりに、自分たちの聞いた「声」や「幻」を付け加えるのです。そして、ひとたび自分たちに次々登場する

直接啓示を「神のことば」と認めるや、その当然の結論として、聖書の権威は地に落ちることになります。どんなに酷い内容でも教理となるのです。例えば先に挙げたような、「おまえは私と結婚する」といった話にならない全く出鱈目なインチキ「お告げ」でさえ教理となるのです。

しかし、聖書は十全完璧な唯一の神の啓示です。これにどんな言葉を付け加えても取り除いても神の呪いを必ず受けます(黙示録 22:18)。そして、神が告げよと命じていないことを不遜にも主の名によって告げる偽預言者は死ななければならないと、神は警告します(申命記 18:20)。ただ死ぬだけではありません。偽預言者(異端者)は、死後、世の終わりに、「硫黄の燃える火の池」すなわち地獄に投げ入れられて、そこで「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」ことになるのです(黙示録 20:10)。偽預言者は、悪魔の言葉を神のことばと偽って、多くの人間を滅びへと誘惑して陥れました。それで、神の怒りと呪いを受けて永遠の地獄へと投げ入れられるのです。

赤羽聖書教会に集うみなさん一人一人が、出鱈目な直接啓示に惑わされて異端となって地獄に引き込まれることなく、唯一絶対の神の啓示である聖書に従って、天国に行くことができるよう、主の御名により祈ります。